The Blue Hammer

ブルー・ハンマー

ロス・マクドナルド

高橋 豊訳

ブルー・ハンマー

ロス・マクドナルド
高橋 豊訳

Hayakawa Novels

THE BLUE HAMMER
by Ross Macdonald
Copyright © 1976
by Ross Macdonald
First published 1978 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by arrangement with
Harold Ober Associates, Inc.,
through Tuttle- Mori Agency Inc.,
Tokyo.

検印
廃止

ブルー・ハンマー
昭和53年12月31日　初版発行

著　者　ロス・マクドナルド
訳　者　高　橋　　豊
発行者　早　川　　清

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京（254）1551（代）
振替　東京・6-47799

印刷　信毎書籍印刷株式会社
製本　株式会社　明光社

定価　1200円
0097-902340-6942

ブルー・ハンマー

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

ウィリアム・キャンベル・ゴウルトに

1

わたしは山の頂上で駐車用の広場になっている私道を登って、その家へ行った。車を降りて町の方をふり返ると、スモッグの中に半ば沈んでいる教会や裁判所の塔が見えた。海峡はずたずたに切れた島の帯に一部が囲まれて、山の背の反対側に横たわっていた。

聞える音は、わたしがさっき通ってきた高速道路の遠いかすかな騒音のほかは、打ち合いされているテニス・ボールの音だけだった。家の横に、高い金網にかこまれたコートがあった。リンネルの帽子をかむったずんぐりした体のシャツ姿の男が、しなやかな体つきの金髪の女とテニスをしている。ゲームにとりつかれたように熱中している彼らの姿は、なぜか刑務所の運動場の中の囚人を連想させた。

男はつづけざまに何度かポイントを取られると、わたしの姿にやっと気づいたふりをして女とゲームに背を向けて、金網のフェンスの方へやってきた。

「きみはリュウ・アーチャーかね」

わたしはそうだと答えた。

「約束の時間よりもかなり遅いぞ」

「あなたの私道を探すのにちょっと手間どったものですから」

「この町のだれかに訊けばよかったのに。ジャック・ビーマイヤーがどこに住んでいるか、だれでも知っているんだ。こちらへくる飛行機さえもわしの家を目標にしているくらいだ」

わたしはその理由がわかった。この家は白い化粧しっくいと赤いタイルのばかでかい建造物で、それがサンタ・テレサのもっとも高い地点に位置していた。それよりも高いものは、町の背後に立ち並ぶ山々と、うららかな十月の空を旋回する尾の赤いタカしかなかった。

女がビーマイヤーの後ろへやってきた。彼女は彼よりもずっと若く見えた。彼女の金髪まがいの頭と細く切りつめた中年の体は、わたしの目には意識過剰なように映った。ビーマイヤーはわたしを紹介しなかったので、わたしは彼女に自己紹介をした。

「あたしはルース・ビーマイヤー。あなたは喉がかわいていらっしゃるでしょ、アーチャーさん。あたしもそうなの

よ」
「くだらないもてなしはやめてくれ」と、ビーマイヤーはいった。「彼は仕事できたのだぞ」
「それは知ってるわよ。盗まれたのは、あたしの絵ですもの」
「とにかく、わしが説明してやるよ、ルース」
彼はわたしを連れて家に入り、彼の妻が少し距離をおいてわれわれについてきた。家の中の空気は涼しくてここちよかったが、建物の重みがわたしを取り囲み、頭上にのしかかってくるような感じがした。それは家というよりも公共のビルディングのようだった——人々が税金を払いに行ったり、離婚するために行くような場所を思わせた。
われわれは中央の大きな部屋の奥の方へのろのろ歩いて行った。ビーマイヤーは絵を掛けていたという一対のかぎ釘以外は何もない白い壁を指さした。
わたしは手帳とボールペンを取り出した。「それはいつ盗まれたのですか」
「昨日だ」
「というのは、絵がなくなっていることにあたしがはじめ気づいたのは昨日だという意味なんだけど」と、女がいった。「でも、あたしは毎日この部屋に入ってるわけじゃないのよ」
「その絵は保険がつけられていたのですか」
「特別に掛けられていたわけじゃないがね」と、ビーマイヤーはいった。「しかし、もちろんこの家の中のものはすべてある程度の保険がついているんだ」
「その絵はどれくらいの値打ちのものなんです？」
「ま、二千ドルくらいだろうな」
「いいえ、それよりずっと高いわよ」と、女がいった。「少なくともその五、六倍はするわ。チャントリーの絵は価値がどんどん上がっているのよ」
「おまえがそんなふうに彼の絵に目をつけていたとは、知らなかったよ」ビーマイヤーは疑わしげな口ぶりでいった。「一万ドルから一万二千ドルだって？　おまえはあの絵にそれだけ払ったのかい」
「あたしがどれだけ払ったかなんて、あなたにいおうとは思わないわ。あたしのお金で買ったのだもの」
「おまえはわしに相談しないで買わなければならなかったのかい。おまえがチャントリーに熱をあげていた当時の情熱は、もうすっかり冷めてしまったのだろうと思っていたの」
彼女はつんととりすましていった。「妙ないいがかりをつけるわね。あたしは三十年間一度もリチャード・チャントリーに会っていないのよ。彼はあたしが絵を買ったこと

とはなんの関係もないわ」
「ま、そういうことにしておこう」
ルース・ビーマイヤーはテニスよりむずかしいゲームで勝ったような、小気味よさげなまなざしをちらっと夫に投げた。「あなたは死んだ男をまだ妬いてるのね」
彼は陰気な笑い声をあげた。「それは二つの点から見て、まったくばかげてるね。わしは嫉妬なんかしていないことをよく知っているし、彼が死んだとは信じられないからな」
ビーマイヤー夫妻はまるでわたしのことを忘れてしまったように言い合っていたが、おそらくそうではなかったのだろう。わたしは彼らの古いもめごとが、たとえば暴力沙汰というような逼迫した問題に発展する危険のないように、不本意ながら双方の間に立って、それについての議論をさせているレフリーのような恰好になっていた。ビーマイヤーは年に似合わず乱暴な男のような口のきき方だったので、わたしは自分の消極的な役割がだんだん我慢できなくなってきた。
「リチャード・チャントリーというのは、どんな人ですか」
女は驚いておれをふり返った。「あなたは彼のことを聞いたことがないの」
「そりゃ、アメリカの人口の大多数は彼を知らないだろうさ」と、ビーマイヤーはいった。
「そんなはずはないわよ。彼は失踪する前から有名だったのよ。まだ二十代にならないうちから名前が知られていたわ」
彼女の口ぶりは懐古的で愛情がこもっていた。わたしは彼女の夫の顔を見た。怒りで紅潮し、目が困惑していた。わたしは彼の妻の方を向いたまま彼らの間へ割って入った。
「リチャード・チャントリーはどこで失踪したのです」
「ここなのよ」と、彼女はいった。「サンタ・テレサなの」
「最近？」
「いいえ、もう二十五年以上も前だわ。彼はこの町から立ち去る決心をしたわけなの。彼の告別の辞によれば、新しい地平線を探し求めて行ったのよ」
「その告別の辞は、あなたに対して書かれたのですか、ビーマイヤー夫人」
「とんでもない。彼の書き残していった手紙を、彼の奥さんが公表したわけなの。あたしはアリゾナにいた当時会っただけで、それ以後は一度もリチャード・チャントリーに会ったことがないわ」
「それは会おうとしなかったからじゃないんだぜ」と、彼

女の夫がいった。「おまえはここがチャントリーの町だから、わしをここへ引きこもらせようとしたのだ。彼の家のすぐ隣りに家を建てさせたのだ」
「そうじゃないわよ、ジャック。ここに家を建てようと計画したのはあなたじゃないの。あたしはただそれに賛成しただけよ。何さ、ちゃんと知っているくせに」
彼の顔の赤らみが消えて、急に青ざめた。まるでうっかり口をすべらせたことに気づいたかのように、彼の目に狼狽の色が浮かんでいた。
「わしは何も知らんぞ」と、彼は老人の声でいって、部屋を出て行った。
彼の妻は後を追おうとしたが、途中で思いとどまり、きびすを返して窓ぎわに立ちどまった。何か気づかわしげなきびしい表情だった。
「うちの主人はものすごく嫉妬深い男なのよ」
「彼がぼくを呼んだのは、そのためですか」
「それはあたしが彼に頼んでそうしてもらったのよ。あたしはあの絵を取りもどしたいの。あれはあたしが持っているただ一つのリチャード・チャントリーの作品ですもの」
わたしは幅広い椅子の肘掛けに腰をおろして、また手帳を開いた。「その絵の特徴を説明してください」
「やや様式化された若い女の肖像画なの。色彩は単純で明るいインディアン・カラー。彼女は髪が黄色で、赤と黒の肩掛け(ショール)を着てるわ。リチャードは初期のころにはインディアン美術の影響を非常に受けていたのよ」
「すると、それは彼の初期の作品ですか」
「ほんとのところは知らないわ。あたしがそれを買った相手の人は、その年代を推定できなかったわけなの」
「ほんものだということがどうしてわかったのです」
「それは見ただけでわかるわ。それに、その画商は出所の確かなことを保証してるのよ。彼はアリゾナにいた当時のリチャードととても親しかったの。ポール・グライムズという男でね」
「あなたはその絵の写真を持っていますか」
「あたしは持っていないけど、グライムズさんが持ってるわ。あなたが頼めば、きっと見せてくれるでしょうよ。ダウンタウンの小さな画廊を経営しているのよ」
「それじゃ、まず彼と話をつけておいた方がいいだろうと思いますが、電話を貸していただけませんか」
彼女はわたしを案内して、彼女の夫が古いロールトップの机の前に坐っている部屋へ入った。その机の傷だらけのオークの側面は、壁に沿って張られた美しいチーク材の羽目板と対照的だった。ビーマイヤーはふり向こうともせずに、机の上の壁に掛けられた一枚の航空写真を見つめてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。それは大地をえぐったとほうもなく大きな穴の写真だった。
彼は郷愁と誇りのこもった口調でいった。「あれはわしの銅鉱山だよ」
「あたしはその写真が昔から嫌いなのよ。もういいかげんにおろしてくれないかしら」と、彼の妻はいった。
「この家はあれのおかげでできたのだぞ、ルース」
「そう、あたしはしあわせよ。ところで、アーチャーさんにここの電話をお貸ししてもかまわない？」
「いや、かまわないというわけにはいかないね。四十万ドルの建物のどこかに、男がひとりでのんびり坐っておれる場所があってしかるべきだろう」
彼はだしぬけに立ち上って部屋を出て行った。

2

ルース・ビーマイヤーは体の輪郭をみせびらかすようにして、ドアの枠木によりかかった。彼女の体はもはや若くはなかったが、テニスとおそらくは怒りが、それをほっそりとひき締らせていた。
「ご主人はいつもあんなふうなんですか」
「いつもって わけじゃないけど。彼は最近悩んでいるのよ」
「なくなった絵のことで？」
「それも悩みの一部だわね」
「ほかにどんな？」
「ま、実際問題として、絵と関係があるかもしれないけど」彼女はためらった。「じつは、あたしたちの娘のドリスは大学の学生で、あたしたちから見れば好ましくない人たちと交際するようになったわけなの。親が心配するのはあたりまえでしょ」

「ドリスはいくつなんです」
「二十歳よ。二年生なの」
「この家に住んでいるのですか」
「困ったことに、そうじゃないの。ドリスは先月、一学期のはじめに引越したのよ。大学の構内のはずれにあるアカデミア・ビレッジのアパートを借りてね。もちろんあたしはあの子をここにおいておきたかったのだけど、しかしあの子は、ジャックやあたしと同じようにあの子自身の生き方をする権利があるというのよ。あの子はジャックが酒を飲むことに以前からとても批判的だったの。ま、正直にいえば、あたしが酒を飲むことについてもそうなんだけど」
「ドリスは麻薬をやってるのですか」
「そうは思えないわ。とにかく深入りはしていないわよ」
彼女は娘の生活に思いを馳せるようにしてしばらく黙った。それは何かはげしい不安をかきたてたようだった。「あの子が交際している人たちの中には、あまり感心しない相手がいるのよ」
「それはだれです」
「フレッド・ジョンソンという青年で、あの子は彼を家へ連れてきたこともあるわ。年はずっと上で、少なくとも三十歳にはなってるでしょうね。大学の雰囲気や余得が好きで、いつまでも残っている学生の一人なのよ」
「するとあなたは、彼があなたの絵を盗んだのではないかと思っていらっしゃるのですか」
「そうはっきりいうわけにはいかないけど、でも、彼は美術が好きで、美術館の講師になってるし、大学の専攻学科もそっちの方なのよ。リチャード・チャントリーのことにはとても詳しいらしいわ」
「この地方の美術専攻の学生はたいがいそうなんじゃないですか」
「ま、そうでしょうね。でも、フレッド・ジョンソンはあの絵に特別な関心を示していたわ」
「フレッド・ジョンソンの特徴を説明していただけませんか」
「やってみるわ」
わたしはふたたび手帳を開いてロールトップの机に身をもたせかけた。彼女は回転椅子に坐ってわたしと向き合った。
「髪の色は？」
「赤みがかった金髪。それをかなり長くのばしてたわ。もうてっぺんが少し薄くなってきてるけど、その埋め合わせにひげを生やしてるのよ。大きなばりばりの靴ブラシみたいなひげなの。歯並みはあまり良くない方ね。鼻は長すぎるし」

「目はどんな色？　青ですか」
「青というよりも緑に近いわね。そうそう、彼の目がどうも気になるわ。彼は決して人をまともに見ないのよ――少なくともあたしに対してはそうだったわ」
「身長は高い方、それとも低い方？」
「中くらいね。五フィート九インチといったところかしら。体はほっそりしてるわ。全体的に見て、器量は悪くない方だと思うわ――もしああいうタイプがあなたの好みに合っていればね」
「で、それがドリスの好みに合っていたわけ？」
「そうらしいの。あの子があんまり彼に惚れこんでいるので、あたしは気が気じゃないのよ」
「そしてフレッドは、紛失した絵が好きだったわけですね」
「好きなんてものじゃなくて、すっかり魅せられていたようだったわ。あたしの娘よりもあの絵に夢中だったのよ。彼がここへきたのは、ドリスに会うためじゃなくて、あの絵を見るためだったのじゃないかという気がしたくらいだわ」
「彼はその絵について何かいってましたか」
　彼女はためらった。「チャントリーの追想画の一つに似ているというような感想を述べていたわ。それはどういう意味かとあたしがたずねたら、おそらくあれはチャントリーが直接モデルを使わずに記憶をたどって書いたいくつかの絵の一つだろうというのよ。そのために希少価値があるのだという意見らしかったわ」
「彼はその価値について具体的な話をしたのですか」
「いいえ。あたしがいくら払ったかと訊いただけ。あたしはいわなかったわ――それはあたし自身のささやかな秘密ですからね」
「ぼくは秘密を守りますよ」
「あたしだってそうよ」彼女はロールトップの机のいちばん上のひきだしを開けて、市内電話加入者名簿を取り出した。「あなたはポール・グライムズへ電話したかったんでしょ。ただし、彼から値段を聞き出そうとしないでね。あたしは彼に秘密を厳守することを誓わせたのよ」
　わたしは画商の電話番号とダウンタウンの彼の住所を手帳に書きとめてから、そこへ電話した。いくらか異国的な、いくらかしわがれた女の声が電話に出て、グライムズはただいま顧客で忙しいけれども、まもなく手が空くだろうといった。わたしは自分の名前を告げて、後ほど立ち寄りたいといった。
　ルース・ビーマイヤーはわたしの空いている耳にしつこくささやいた。「あたしのことを彼女にいわないでね」

わたしは電話を切った。「彼女って、だれです」
「たしかパオラという名前だったと思うわ。彼の秘書だといってたけど、もっと親密な関係なんじゃないかな」
「彼女の訛りはどこですかね」
「アリゾナなのよ。たぶん彼女はインディアンの混血だろうと思うわ」
わたしはジャック・ビーマイヤーがアリゾナの風景をえぐった大きな穴の写真を見あげた。「これはアリゾナの事件になりそうな気配ですな。リチャード・チャントリーはあちらの出身だとおっしゃったでしょ」
「ええ、そうよ。あたしたちはみんなそうなの。でも、最後にはカリフォルニアに住みついてしまったわけなの」
彼女の声は単調で、別れた州への愛惜も、いま住んでいる州に対する満足感も、まったく現わしていなかった。それは失意の女のような声色だった。
「あなたはなぜカリフォルニアへ移ったのですか、ビーマイヤー夫人」
「あなたはあたしの主人のいったことを念頭においているらしいわね。ここがディック・チャントリーの町だとか、そのためにあたしがここに住みつきたいと思ったのだとかいう話を」
「それはほんとうですか」
「たぶん、少しはほんとかもしれないわ。ディックはあたしが親しかったただ一人のりっぱな画家で、ものの見方をあたしに教えてくれたのよ。だから、彼が最高の仕事をした土地に住むというのは、たしかに嬉しかったわ。彼は七年の間にすべての傑作を描いてから、突然姿を消してしまったの」
「それはいつごろのことですか」
「正確にいえば、一九五〇年の七月四日」
「彼は自発的に姿を消したのですか。それとも誘拐されたか、殺されたのでしょうか」
「そうは思えないわ。彼は奥さんに書置きの手紙を残して行ったのだもの」
「で、彼の奥さんはいまもこの町にいるのですか」
「ええ、いるわよ。じっさいの話、あたしたちの家から彼女の家が見えるのよ。この峡谷のちょうど向こう側にあるの」
「あなたは彼女を知ってるわけですね」
「若いころはフランシーンとたびたび会っていたから、よく知ってるわ——親しくはなかったけど。でも、あたしたちがここへ越してきてからは、ほとんど会ったことがないわ。それがどうかしたの」
「彼女の夫が書置きした手紙を、ちょっと見たいと思いま

してね」
「コピーならあたしが持ってるわよ。その手紙を複写したものを、美術館で売ってるの」
彼女は部屋を出て行き、そのコピーを持ってもどってきた。それは銀の額縁におさめられていて、彼女はわたしの前に立ったままそれを黙読した。彼女の唇がまるで連禱をくり返しているように動いた。
やがて彼女はややためらいながらそれをわたしに手渡した。その手紙は署名以外はすべてタイプライターで記され、日付は一九五〇年七月四日、サンタ・テレサにてとあった。

フランシーンへ
これは別れの手紙だ。きみと別れるのは断腸の思いだが、しかしぼくはどうしてもそうしなければならない。たびたびきみに話したように、ぼくは海にも陸にもない光がその向う側で見える新たな地平線を発見する必要があるからだ。この美しい海岸や歴史は、かつてのアリゾナのように、語るべきことをぼくに語ってくれた。
しかし、アリゾナすらも歴史は浅く新しいために、ぼくのもっとも重要な宿命的な創作の力となることはできないのだ。ぼくはほかのどこかに根をおろし、もっと奥深いほら穴の闇と、もっと鋭い光を探し求めなければならない。ぼくはゴーギャンのようにそれをひとりで探し求めなければならないことを悟った。なぜなら、ぼくが探索すべき世界は物質界ではなく、ぼく自身の魂の宝庫なのだから。
ぼくは着ている衣服と、ぼくの手紙と、きみの思い出だけを身につけて行くことにした。いとしい妻よ、親しい友人たちよ、どうか愛情をこめてぼくを思い出し、ぼくを祝福してくれたまえ。ぼくは宿命を果たすしかないのだ。

リチャード・チャントリー

わたしは額に入った手紙をルース・ビーマイヤーに返した。
彼女は、それを胸に抱きしめた。「どう？　すてきでしょ」
「さあ、それはどうですかね。美は見る者の目にあるものです。いずれにしろ、それはチャントリーの奥さんにとっては大変なショックだったでしょうな」
「彼女は案外平気なようだったわ」
「あなたはそれについて彼女と話し合ったことがあるのですか」

「いいえ、そんなことはするもんですか」わたしは彼女のとげとげしい口ぶりから、彼女とチャントリー夫人は仲がよくないらしいと思った。「でも、彼女は彼から受け継いだ名声にあやかって、いい気になっているみたいよ。彼が遺したお金で裕福に暮していることは、いうまでもないけど」

「チャントリーは自殺癖があったのですか。彼が自殺について語ったことがありましたか」

「いいえ、もちろんそんな話をしたことはなかったわ」しかし、彼女はしばらく黙ってからつけ加えた。「でも、あたしがディックと知り合ったのは、彼がずいぶん若かったころなのよ。あたしはもっと若かったわ。じっさいのところ、あたしはもう三十年以上も彼と会ったことも話したこともないわ。しかし、あたしは彼がまだ生きているような気がしてならないの」

彼女は少なくとも彼がそこに生きているのだといわんばかりに胸へ手をやった。小さな汗の滴が彼女の上唇ににじみ出ていた。彼女は手でそれを拭いた。

「あたしはこのために神経が少しおかしくなってるんじゃないかと思うの。過去がだしぬけに現われて、襲いかかってくるのよ——やっと抑えつけることができたと思ったとたんにね。あんたはそんな経験がない？」

「日中はめったにありませんね。夜中に、眠る直前に——」

「あんたは結婚していないのね」彼女は敏感な女らしい。

「結婚していましたよ、二十五年前には」

「その奥さんはいまも生きてるの」

「だろうと思いますが」

「それをつきとめようとしたことはないの」

「最近はもうそんなことはしません。ほかの人たちが生きているかどうかをつきとめる方が好きなんでね。さしあたって、ぼくはチャントリー夫人に会って話をしてみたいと思います」

「なぜそんな必要があるのかしら」

「ま、ものは試しですよ。彼女から背景の情報を聞き出せるかもしれません」

相手の女の顔が不服げにこわばった。「だけど、あたしがあんたに頼んでいるのは、あたしの絵を取りもどすことだけなのよ」

「しかもあなたは、そのやり方をぼくに教えてやりたがっていらっしゃる。しかし、ぼくはほかの依頼客たちのいうとおりにやってみたことがあるんですが、いずれもうまくいきませんでした」

「しかし、あんたはなぜフランシーン・チャントリーと話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com